

航米日録 卷五

【フィラデルフィア出立からニューヨーク滞留まで】

注意：現代語訳の作成に当たっては、以下の点について心した。

- (1) 「日本思想大系 66 西洋見聞集」(岩波書店,1974年12月)記載の「航米日録」(沼田次郎氏(東大名誉教授)校正)をほぼそのままに現代語に変換するよう心掛けた。
- (2) 玉虫自らが注意書きした箇所は()内に示した。
- (3) 地名、呼名については、沼田次郎氏の校正註を基に現代語に変換した。沼田次郎氏の校正註は《 》内に記載した。
- (4) 校正註について疑問がある点、或いは読者の利便を考えた註を筆者(菅原)の独断にて付加した。それを【 】内に**朱記**にて示した。
- (5) 2月2日午後6時頃に、東経から西経へ日付変更線を通じたので、日にちを減ずる必要があるが、そのままになっているので文中の曜日が合わなくなっている。このため筆者(菅原)が日にちを修正した。尚、玉虫の日付を【 】内に**緑記**した。又、旧暦と新暦の対応は、筆者(菅原)が付加した。

旧暦万延元(1860)年4月27日(新暦6月16日)【4月28日】晴。

午前8時過ぎ、ホテルを出立する。車に乗り東へ向う。十五・六町【1.6km】行くと川があり、名前をテナハレ《デラウェア河。以下デラウェア河と記す。》と言う。警察官が車の左右を警備している。ここから蒸気船に乗って向こう岸のカムデン(郡名:Camden)に渡る。川幅は狭く十町【1km】余り、河の中央に小島が有り、昔から水運に便利な様にこの小島を左右に分断し、その中を船が航行している。カムデンは人家が陸続きで頗る大きな町【原文は「邑」とある】である。ここから蒸気機関車に乗り、東北方向に向かって走る。二三里も行くと郊外になり、左はデラウェア河に沿っている。前岸は花畑が数里程連なり【原文は、「花屋軒を接すること数里」とある。】、遠目には非常に美しい。この辺は全て荒れ果てた土地が少なく、畑は小麦・キビ・エンドウマメ・蔬菜等を植えている。窪地には川柳・カキツバタが植えてあるのが見える。更に十里程行くと又大きな町が有り、デラウェア河に沿う街道に【日本人一行を見ようと】見物客が雑踏している。機関手が蒸気を緩め、自分達を彼等に見せようとしていた。左右皆商家で大きな建物である。又行く事数里で「ソートアンボーイ《South Amboy:サウスアンボイ》」に着く。ここはフィラデルフィアから64里【102km】の距離で、2時30ミニートで着いた【このことより、当時の機関車の時速は約40km/hであった。江戸時代、仙台と江戸間(約365km)の所要日数は9日であったということから、

徒歩で102kmに行くには約2日半掛かった。それが2時間30分で着いたことは、玉虫にとっては驚異であったと推察するに難くない。】。川があり、「ニューヨークプリンセスベイ」という名である《川ではなく湾と呼ぶのが正しい》。ニューヨークから河川用の蒸気船が一隻我々を迎えに来て、川岸で待っていた。船名は「アライダ《Alida》」と言い、直ぐに乗り移った。此の時の警備は岸頭に小砲隊を配置し、他に十三・四歳から十七・八歳までの少女を男装させて、小旗を持たせて左右に整列させていた。その数は二三十人程であった。容色は非常に綺麗で、日本の山王祭りで鉄棒を持った鉄杖子(カナボウヒキ)の踊り子を思い出させるものであった。迎えの船には士官の他に、歩卒・楽人等が乗っていた。ここから東に向って数里程航行して海灣に出る。ロングアイランド(島名)を右に見て七・八里程の航行でニューヨーク港に着く。山麓に沿って砲台が設けてあり、レンガ造りで砲窓が四層、周囲は土堤を築いてある。そこで祝砲が鳴らされた。人家が連なり、停泊の船が櫛の隙間も無いほどに一杯で、数里の間、隙間が無い。往来の船が縦横に航行し、蒸気が四方に響いている。米国第一の埠頭であることは、一見すれば分かる。ソートアンボニーから30里【48km】の距離であるとの事。そこに上陸し、御奉行等は全て車に乗って行く。陸上に大砲八門を備え、祝砲を発した。その後、車の左右に歩兵が二尺程の棍棒を腰に携えて横に整列して居る。又別に車が一輛あり、車上に美しい色の天幕を張って四面に美しい花を飾り、車前に日本と米国の国旗とを並べ掲げており、その美しさは言うまでも無い。ここに【日米修好通商条約の】批准書を入れた函を載せ、官僚が二人乗車している。その前後に民衆の車が続いて進んで行く。市道に見学者が多く、立錫の余地も無いほどで、各人声を発して祝福している。それはあたかも関(とき)の声を上げている様であった。ビルの屋上や棧敷席には日本と米国の国旗とを飾り、或いは手に持って振り、非常に混雑していた。一里【1.6km】程行くと広い道があり、暫らく車を止めて隊列を整えた。小砲隊が車の左右前後に配置し、騎馬隊・大砲隊・架橋兵・啓行兵・楽隊が前後に配備された。各隊は色で分かれ、【役職・階級を示す】冠服はまた各々異なり、赤や、黒、白、黄、青色があり、何れも美しいものである。又、日本で言う「陣羽織」の様な物を着ている人や、裾が開いて短衲衣(チョッキ)の様な物を着ている人も居る。架橋兵は車上に材木を載せ、啓行兵は斧やまさかりを担いでいる。隊中に女性が二人肩に薬箱を下げ、冠帽を被り赤いチョッキを着て行進している。これは傷病者に薬を与える役目をしている【現在の看護師であろう】。凡そ、小砲隊四千人、騎馬隊二千人、大砲車十六輛、総計七千五百人との事である。これ米国開闢(かいびやく)以来の警護と言う。そのため、見学者が数里に亘って雲霞の様に集まっている。見る方も嬉しくなってくる。午後4時頃に漸くホテル《メ

トロポリタンホテル、BroadwayのMetropolitan Hotel》に入る。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月28日(新暦6月17日) 【4月29日】 晴。

滞留【ニューヨーク】。このホテルは【日本人一行が宿泊している】ので 厳重に警備されており、二階の正面には歩兵が二人、棍棒を腰に携えて昼夜警備している。日本人がホテル外に出る時は、五人に一人の割合で案内者が付く。これは日本人が分けが分からないということではなく、この港は万国との交易の地であり、日本と米国とが和親条約を締結したのを嫉む者が居て、奸謀をする者が居ないとも限らず、最も英国が一番甚だしいとして、これにより厳重に日本人を警護しているとの事である。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年4月29日(新暦6月18日) 【5月01日】 晴。

滞留【ニューヨーク】。午後に御奉行等、ニューヨークの市役所に行く。そのときの警備として小砲隊五百人・騎馬隊三十余騎・楽隊四十人程で左右前後に配置し、非常に厳重であった。午後2時頃ホテルに戻られた。ホテルの前は昼夜五六度、小砲隊・楽隊が相並んで行進している。これは、日本人一行の滞留中の警備のためであると言う。その厳重さは言うまでもないことである。夜、ホテルの別の部屋で演劇を見た。劇場で上演された音曲を自分がかつて知らないけれども、米国の風俗・習慣を考え、米国人の嗜好の一端を知る機会であると思い、この地で初めて演劇を見た。その劇場は、我々が宿泊しているホテルの中に有り、舞台上左右に山川、或いは昼夜四時の障壁を設けて、機工を駆使して舞台を回転させる。その変化は極まりないことである。男優・女優数十人が老人或いは若者となり、或いはならず者或いは盗賊となって、姿かたちが数種に変化して尽きることが無い。観客数百人、拍手或いは足を踏み鳴らして賞嘆している。もし一曲が終わって賞嘆の声が止まない時は、【アンコールとして】もう一曲の演奏を願う。且つ、数曲の演奏の後、暫らく幕を下ろして休憩する。これは俗に言う一幕と言うものである。この時に観客は外庭に出て酒を飲んだり、菓子を食べたりして自由に過ごす。暫らくして拍子木を打ち鳴らし開始の合図をすると観客は競って集まる。これは劇場の仕来りであると言う。今夜の演劇には、始め舞台上は山中の設定となり、樹木が森々と繁茂して、泉の音が耳に響く。一少女が居て父母に逸(はぐ)れて独り捜し求める情景である。途中賊徒に逢って殆ど強奪されかけようとしたが、少女が懸命に説得したので賊徒は去って行った。舞台は直ぐに場面が変わり秋の景色となった。草木は枯れ落ち、虫の音が寂しく鳴いて人を悲しませる

設定である。少女が独りでその場所を探し回っているとヤクザ者が独り側から現れて来た。少女と話すこと数刻に亘り、お互いに両親を探そうと約束した。その後、ヤクザ者は変心して少女を襲おうとしたため、少女は非常に怒って反撃したため、ヤクザ者は驚いて数回ほど謝り、その場を去って行った。ここで歌舞数曲が終わり、舞台が変わって貧者の埴生の宿の設定となり、一老父が出てきた。その容貌は少女の父親に似ている。**【少女は】**大いに喜んで直ちにその家に行った。しかしあにはからんや、その老父は腹黒い悪者で、自分をその少女の父親だと偽って少女を騙し、他人に売り払おうとした。少女は事態を理解し、心が痛くなり、夜中にこっそりと逃げ出した。山や川を渡っている間に自分が何処に居るのか分からなくなった。その辛酸は言い難いものである。又また舞台は変り、高層の宮殿となった。少女はその家を訪ねて、一飯をお願いした。一人の婦人が居て、少女のボロボロの姿を見て憐み、何故その様になったのかを尋ねた。少女は切々と事の顛末を語ったため、その婦人は非常に心を揺さぶられ、其事を夫に話し、下僕数人を借りて一緒に探し始めた。少女の父親は幸いな事に近所で雇われ人として働いており、少女がその場所に行つてその男性を見て間違いなく父親だと分かり、お互いに抱き合つて喜んだ。その場に居た全員は少女に憐憫の情を覚え、お金を与えたり衣服を与えて、終に親子は元の様になった。この場面で女優全員が舞台の左右から出て来て、賑やかに歌い踊ったりして時間が過ぎて行つた。観客からは拍手が止まず、或る者は花束を投げ入れたり、或る者はハンカチを投げて手を叩き悦んでいた。この事は煩雑で、かつ言葉が通じないので、全てを理解することは不可能であった。今ここに記したのは大略を述べたものである。米国の劇場の俳優は、男子は男優と成り、女子は必ず女優と成り、一人が男優をしたり女優を兼ね持つことはしない。女優は当地の売妓で、夜10時頃になれば各々家に帰つて客を迎えるとの事である。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月01日(新暦6月19日) **【5月02日】** 晴。

滞留 **【ニューヨーク】**。午前8時頃、市街を散策する。ホテルから東南の方向に三四町 **【350m】** 行く。 **【日本人一行を見ようと】** 見物客が雑踏して、自分達の行く手を妨げて自由に散策することが出来ない。各店舗は美麗で店はガラス戸を閉め、みだりに入ることを許さず、中にはガラス箱へ諸品を入れて左右に陳列している。このため、一品と言つてもガラスに映るため数品に見える。殊に金銀の道具の多くは一見して目にキラキラと輝いて見える。唯、その値の高いことは日本の数倍で、お金の無い自分にとってはただただ手をこまねいて見ているのみであった。夜、別の部屋にて演劇が有り、昨夜と同じであった。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月02日(新暦6月20日) 【5月03日】晴、午後雷。

滞留【ニューヨーク】。午前8時頃、荷物の運送に関して、海軍製造所「ネビヤールト」へ行く。ホテルより10里【16km】程の東南に当たり、川【イーストリバー】を渡って行く。地名は「フックレエン《Brooklyn:ブルックリン》」と言う。1時間程車に乗っていく。「ネビヤールト」は、部中の兵器を全て此処で製造している。その広さは十町【1km】余り、建屋も別々に作り、各建屋では別々の物を製造している。時間が無かったので詳細に見ることは出来なかった。道端には大砲が、数千門並んでいた。又、大小の弾丸が山の様に数箇所にも積まれており、器械がそれに対応して具備されている。側に一軒の家があり、暫らくそこで休憩した。シャハン(酒名)《Champagne:シャンパン》等を出した。戸外に庭園があり、草花が植えてある。ここで初めて梅樹を見た。今梅が実を結び、日本と異ならない。この樹は他から移植したものであろう。此処を去り車に乗って一二町【150m】ほど行った所に土蔵が有り、ワシントン市から送った荷物が既に届いていた。各荷物を検閲し終わって、そこを去って前来た道をそのまま車で引き返した。市街は男女で雑踏し、煩わしいこと頻りである。午後2時過ぎにホテルに到着した。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月03日(新暦6月21日) 【5月04日】晴。

滞留【ニューヨーク】。午後、市街を散策する。昨日と同じ道に行く。【デパートと思える】店舗の大きいことは日本の大寺院の様で、目に見るといってもその詳細なことは言い尽くすことが出来ない。そのうちで衣類を販売する店が最も大きく、各階毎に商品を分けて販売している。千種万品有り、一々枚挙することは出来ない。まったく、目を見張るばかりである。午後、御奉行等がセントラルパーク《Central Park:セントラルパーク》と言う所に行く。この場所はニューヨーク市街の中央に有り、庭園を造営《1857年に建設が始まり、造園終了・正式開園したのは1873年である》している。風情があって非常に珍しく、現在造営している最中で、大凡一千万ドルを出費しているとの事。午後4時過ぎにホテルへ帰られた。今日、或る人が聾啞の施設へ行った。その人の話を聞くと、ホテルから五六里【9km】程離れたブルックリンと言う所に聾啞の施設が有り、生徒が300人程居た。七八歳から二十歳の者が多く、皆手話で教えている。例えば、英語のa字は親指を折り、b字は人差し指を折ると言うものである。敏才な生徒は、一年も学習すれば文字を綴り、多少の事は会話出来るようになる。今日、日本人が施設を訪れたことを祝うべく、先生が手話でそのことを伝えると、テーブル上で各

人その内容を書き記した。その速い事は、あつと言う間だとの事。これを聞いて、米国では【障害者だと言って】人を捨てないことを知った。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月04日(新暦6月22日) 【5月05日】晴。

滞留【ニューヨーク】。午前8時過ぎ、市街を散策する。又同じ道で別に見る所も無い。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月05日(新暦6月23日) 【5月06日】晴。

滞留【ニューヨーク】。午後市街を散策する。車道に散水するのを見ていると、それはまさにフィラデルフィアと同じである。又、子供の安全を確保する遣り方を見ていると、子供を積極的に「おんぶ」せず、小車【乳母車のことと思う】に載せて大人がこれを引いて行く。子供は車上に居て遊んだり寝たりしてその様子はゆったりしている。これは米国中で皆同じ習慣と言うことである。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月06日(新暦6月24日) 【5月07日】晴。

滞留【ニューヨーク】。今日は日曜日で、市中の商店は休みである。午後、ホテルの3階に上がって見ると、各部屋には夫婦が居た。どうしたことかと質問すると、彼等は皆ホテルの従業員であると言う。たとえ従業員といえども、一つの部屋を貸し与え、妻帯せしめている。これは人口を多くしたいが為であろう。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月07日(新暦6月25日) 【5月08日】晴。

滞留【ニューヨーク】。午前8時過ぎから市街を散策する。動物の観場【ニューヨークには世界最大級の動物園であるブロンクス動物園があるが、その開園は1899年であり、玉虫は見ていない。このため、セントラルパーク内にある動物園と思われる。】があり、珍しい動物が居るが、残念なことに名前を知らない。或る動物は鉄の鎖で繋がれていたり、他の動物は鉄の檻内に居る。ライオン・虎は生きている物を展示せずに、毛皮でそれを象(かたど)っている。虎は日本の画虎にやや似ている。ライオンは大いに異なっていて、首の辺りにたてがみがあるだけで、その他の部分は皆短毛となっている。尻尾は細くて長い。又虎の子を見る。【子供なので】まだら模様にはなっておらず、顔は猫の様で毛は薄赤、大きさは五六尺である。ここから五六町行くと、頻りに我々を招き寄せる者が一人居て、そこに行ってみる。そこ

は手品を見せる見世物場所(日本で言う手品)で、広さ十間程、正面にガス灯を点し、手品に用いる器具を並べている。二三人居て、手品を実演している。この場所より一段低い所に椅子を並べ、見学者はそこに座る様になっている。手品の素早さは本当に驚くべきものである。今一例を挙げると、初めに一人居て、紙を張ったザルの様な物を被り、テーブル上に登る。一間程離れて一人居て、小砲を発してこの人物を撃つ。ザルが忽ちに倒れて、その人物は既にそこには居ない。暫らくして十間程【18m】離れた外から突然に人が出てくる。その人は正にザルを被っていた人である。その他に数種の手品があり、同様なものである。午後4時過ぎにホテルに帰る。夜、ホテル別室にて、今回の修好通商条約締結の祝賀として大饗応があった《ニューヨーク市長主催の歓迎舞踏会》。その部屋の形は、正面一間程で一段高く、その他は全てそこより低く、広さ十間、天井は草花を円形に並べ、周囲はガス灯八個或いは六個を点し、この様な物を数箇所 to 設け、またドアに草花を飾り、日本と米国の国旗を左右斜めに交えて掲げ、庭中はヒバで半円に形作り、ガス灯数十個を数箇所 to 点している。その光りは爛々として白昼の様である。夕方から男女が入って来て、手を組んで踊り始めた。その人数三千人と言うことである。見学者は数百人、一曲中に雑踏して踊り子と交わり、誰が舞踏しているのか見分けるのが難しい。御奉行は正面の高所に座り、米国人は御奉行を見たいと思って踊り子には目もくれず、やたら混雑していた。午後8時頃には乱舞となり、各人酒を飲み酒瓶を開ける音(米国では酒瓶の口にコルクを堅く詰め、これを開けるときはその器具が有り、そのときの音が高くて四方に届く。)が寸時も絶える事が無かった。後刻、男女が酔っ払って、日本人と握手・抱擁をしてきた。或る者は花束をくれたり、或る者は酒をくれ、談笑して座席を動き回っている。その喧騒さは甚だしいものであった。午前4時頃になって漸く静かになった。今夜の饗応は、米国人の官僚の妻子を除いて、他人は入室を許可されていなかったのであるが、この様な事態であった。もし官僚に関係なく入室を許可したならば混乱は計り知れないものであっただろう。不思議な習慣と言うべきである。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月08日(新暦6月26日) 【5月09日】 晴。

滞留【ニューヨーク】。午後 to 市街を散策する。同じ道であり、特に見るべきものなし。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月09日(新暦6月27日) 【5月10日】 晴。

滞留【**ニューヨーク**】。午前10時過ぎ、市街を散策する。ホテル近傍で器を求めようとして、秘かに一人で外出したが、米国人達が自分を見て四方から集まり来て、握手したり或いは品物を贈って実に親切である。自分を頻りに招く人が居るのでその所に行ってみると、金物細工の工場であった。金物にて竈(かまど)を作り、その中へガスを革の管で送り入れると、竈は直ぐに烈火のように熱くなり、薪火の火力より優れている。その上に釜・鍋を掛ければ煮炊きが自在に出来る。その他、種々の機工を用いて自分を楽しませてくれた。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月10日(新暦6月28日) 【5月11日】 晴。

滞留【**ニューヨーク**】。明日は日本へ帰る出帆のため、一日中荷物を確かめて、部屋中混雑していた。夜になって漸く静かになった。

○寒暖計不試

旧暦万延元(1860)年5月11日(新暦6月29日) 【5月12日】 晴。

午前10時過ぎ、御奉行を始めとして全員が動き始めた。自分は荷物を管理するため皆に先立って出発した。南の方向に一里程行くと乗船場に着く。《ハリエットレインと言う名の》河川用の蒸気船が待っていて、荷物を積んで出航する。半里程行くと直ぐに海湾に出、ナイアキラ《ナイアガラ：Niagara、以後ナイアガラと記す。》船に乗り換える。この船は非常に大きな蒸気船で、米国では有名な船であると言う。乗船場からここまで、船舶の往来がひっきりなしで蒸気音が絶える事は無い。又、岸には数千の船が隙間なく接岸して停泊している。殊に英国の豪華客船《Great Eastern号》を見る。その長さ百十六間【208m】、マスト全6個、蒸気機関が二箇所設置され、煙突全5個、一つは暗車《スクリュウ》、一つは露車《外輪》である。乗客数一万人、一日の走行距離は二百五十里【400km】から三百三十三里【533km】で、大波の中でも平坦な道を進む様に航海するとの事である。御奉行等はその船の近傍に行ってみられたとの事であるが、自分は荷物の管理をしなければならず、行って見る事は出来ず、遠目に見るのみであった。午後2時過ぎに御奉行等がナイアガラ号に乗船した。船中で小砲隊が隊を組み、音楽を演奏して祝砲を打ち鳴らす。その待遇は極めて丁重であった。送別に来た米国人が各人分かれの挨拶をしたそのとき、互いに祝声をだした。他に別の船に乗って別れを告げる人も居て、祝声をだして去って行った。乗船後に荷物があちこちに紛れ込んで、夕方になっても未だ確定しなかった。且つ、部屋の分割も決まらず大変混雑していた。夜になって、漸く荷物が各人に引き取られたが、荷物と共に雑居する状態で、膝を伸ばして寛ぐ状態ではなかった。これは船旅では仕

方の無いことである。

○寒暖計不試

ニューヨーク情勢

ニューヨーク市にある一大港は、海門を南に面し、東にロングアイランド(島名)があり、西にサンテホック《Sandy Hook：サンディーフック》がある。ここに入り十町程で左右に砲台を備えている。右岸には砲窓四層で皆レンガ造りの砲台があり、六稜角の構造になっている。左の砲台は海岸に築き、円形で砲窓三層である。左右の砲台の距離は僅か十八、九町で、ここから一里程中に入れば人家の樹木が繁茂し、所々に白壁を見る。非常に絶景である。又、五・六里行くと川があり、ここは二つの川(ハツオンリバ《ハドソンリバー》とイーステリバ《イーストリバー》)が合流し極めて大きな川となっている。左に砲台があり、円形で四層である。船舶が往来し、船首と船尾が相接するほど往来が有る。ここを入ると二流となり、西はハツオンリバ《ハドソンリバー》と言ひ、ナイアガラから流れ来る。東はイーステリバ《イーストリバー》と言ひ、ボストンから流れ来る。この間がニューヨークである。一名、マナツタン《マンハッタン》島と言う。前に多少の島群があり、台風が来ても恐れるに足りない。且つ、港は広くて水深が深く、大艦・巨船舶が自由に往行出来る。このため、万国の船舶が頻繁に出入し、常に数百艘を下らない。米国第一の大港である(訳書には、通商の盛んであることは英国のロンドンを除いては、全世界中、この都市の右に出るものが無いと言うことである)。市街は南北十一里、東西二河の間三里程で道路が碁盤の目の様に整然としている。道路には全て平たい敷石を敷き、中間に二条或いは三条に道を分割し、中を車馬道とし、人が通行することは禁止している。左右の道を歩行用道路とし、車馬が入るのを禁止している。この様にしてその道路の幅は大抵十六間【29m】である。殊に自分が宿泊していたホテルの前はブロードウェイ(街名)と言う所で、ニューヨーク中、第一の繁華街で大きな商店や家が軒を並べ、それらの建物はレンガ造りであり、鋳物又は大理石で柱としている。窓戸には金銀を散りばめて美しく、車の往行は絶えず、人の行き来もまるで雲霞の様である。街の左右、二間ほど隔てて燈台【街灯】を建て、夜は必ずガスを点灯する。輝々として白昼の様である。このため、道を往来する人は、夜中と言っても明かりを携える必要は無い。又、所所に遊園を設け、国民の貴賤に関わらず見学させている。緊急時には、物を集め置く場所として利用している。その内で最も広いものは、セントラルパークと言う。ホテルより西北の方向に半里程の所で、縦二里、横半里ばかりの大きさである。山河の形を作り、草花・樹木を植え、非常に景色の良い所である。中に湖水があり、コロトン(湖名)と言う所から水を引き、この場所

に貯水し、ここから鉄管で市街へ水を通じているとの事である。日本の神田・玉

川上水と同じ様なものである。又、市街の所に  の様な高樓を見る。何なのかが分からない。或る説によると、天主様を安置する場所であろうと言うことで

ある。又、ホテルから東南に少し離れた所に  の様な高樓がある。これは望火楼と言ひ、高さ数十丈である。この地には又、両河を隔てて市街がある。ハドソンリバーの前岸はニュージョーサー《New Jersey : ニュージャージー》と言う町で人家が稠密状態である。イーストリバーの前岸はフソロクケレエン《ブルックリン》と言う町で、繁華な所である。この所に海軍造船所ネービーヤードを増築している。軍艦等の製造に必要なものは皆具備している。常時渡船で往復している。日本の江戸の深川・本所の様な所である。人口は大凡一百万人と言う。万国出入の人数を加えると百五十万人にもなると言うことである。米国第一の大港である。

風俗

この都市は、万国の文物が集まる交易の地で、人情が希薄であるとの事であるが、我々日本人に対して特に無礼を働くことは無い。唯、驕り高ぶる気があって、全ての物がこの地で生産されていると言う気持ちで待遇する。そのため、暫らく談話をしていると、「グートニーヨルク《Good New York》」と言う。「グート」と言うは「善」と言う意味である。そうであれば、日本を言及することを見る必要がある。**【意味把握出来ず】** 華美で贅沢なことは米国何処でも同じであるが、ここニューヨークは随一である。家具の文様、衣服の華美、一つとして人目を惹かぬものは無い。富裕な女性に至っては、頭の飾りから指輪の小物に至るまで皆金銀・珍石を用いて、一人の装飾に大抵1000ドル以上を費やすとの事である。従って美を尽くさないとその富裕層に入れれないと言う事である。下流層と言っても市街を往来する者、一人として粗服を着ている者を見かけない。職業を遂行するに至っては怠けることなく、休日でも無い限りは特に遊宴することは無い。商店の多くは金銀等の道具を用い、それが爛々として輝いて見える。男女の装具としては羅紗**【ポルトガル語の raxa : 毛織物】**・ビロード**【ポルトガル語の veludo : ベルベット】**・更紗**【ポルトガル語の saraca : 綿布】**の類が店頭に山をなし、時計・遠眼鏡・顕微鏡・晴雨計の類は精巧な技術で作られて棚の上に陳列されている。その数が幾万であるかは分からない。その値段は非常に高く、2～3ドルでは一品も買えない物である。且つ、商いは大抵座って行い、行商は少ない。唯、ホテルの前に毎朝来て蔬菜類を売のを見かける程度である。皆車に載せ、担いでいる者は居

ない。又、露店があり、飲食を提供している。その他、娯楽場・曲芸見物所がある。妓楼は数箇所にあり、その数は最も多いと言われている(訳書には、百五十戸あるとの事)。その値段は、安いもので1ドル、高いもので5ドル以上と言われている。ホテルの前はこの都市一番の繁華街で、市街には庸車【乗合バス】があり、一人6セントの値段で数人乗り合い、この広い道を往来させている。日本の辻駕籠の様なものである。車声は昼夜絶える事が無く、夜半眠りを覚まされることがある。その繁華なことは他の都市の比べ物にならない。

時候

北緯40度の所なので、ワシントン市に比べれば少し寒冷であるが、人家稠密なので暖かい。現在【旧暦】五月中旬であるが、既に単衣(ひとえ)を着用している。朝夕時たま裕(あわせ)を用いるのみである。胡瓜・インゲン豆・トウモロコシ等の類が実っている。晴天が多くて雨が少ないので、我々がニューヨークに逗留して12・3日になるけれども、僅かに一度小雨が降ったのみである。風は激しくは無い。気候甚だ穏やかである(訳書に、平均気温51.6度【10.9℃】、夏は70.2度【21.2℃】、冬は30.1度【-1.1℃】とある)。

草木

この地は繁華の土地柄、独行は厳禁されており、草木を探す時間が無く、唯朝夕食事のときに出る蔬菜は胡瓜・トウモロコシ・大根の類である。草花は時たま見かけるがその名前は分からない。梅の木は是まで一度も見かけなかったが、この都市に来て初めて一本の梅の木を見た。恐らく他から移植したものであろう。桜・竹の類は一度も見かけなかった。

生物

市街の動物園にて、熊・ヒグマ・虎・ライオン・猿の類を見る。この土地で得られたものであるか否かは分からない。朝夕食事に出てくる魚は、サメ・鮭・海老の類である。犬・羊・豚・牛は他の土地と変わらない。ツバメ・スズメ・カラス・トビはかつて見たことが無い。

貨幣

この都市は、万国の文物が集まる一大条約港を有しているため、貨幣の融通は頗る盛んで、他の国の貨幣であっても貨幣の値打ちに関わらず喜んでこれを受け取る者が居る。そのため、日本の方銀二個で1ドルと交換するのが常である。或いは天保銭10個で1ドルと交換する者も居る。このため、数多くの貨幣を見ること

が出来る。

物価

この都市では物価が定まっていず、同品でも安く仕入れる者が居たり、高い値段で買ったりする者が居る。このため、買う人に拠って値段の高低を決めている様に見える。又、日本人の饗応のために値段を言わない場合もあるかもしれない。今、事例を以下に挙げる。

一 米五升	50セント
一 コップ一個	1ドル(品質により甲乙があり、値段不定)
一 洋布12丈	2ドルから5ドル程
一 羅紗三尺	1ドルから5ドル程
一 シャンパン酒一瓶	1.5ドル
一 地球分図	5ドル
一 字書	1ドルから10ドル程
一 地球儀	1ドルから5ドル程
一 ナイフ一個	50セントから5ドル程

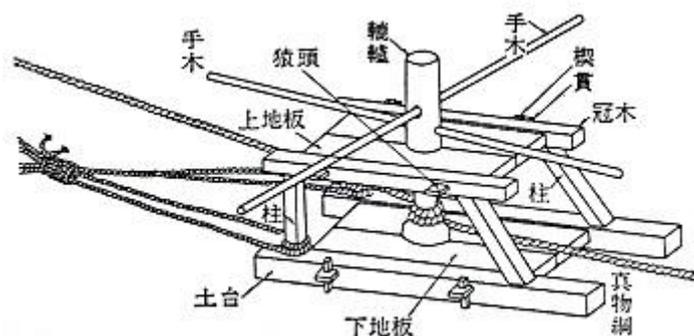
ホテル

ホテルは着岸場から東北の方向に2里程離れた所で、町名はブロードウェイ、ホテルの名前は、ミツテルホリテン《メトロポリタン》と言う。非常に大きな建物で、高さは9階、部屋数500室、その作りは他のホテルと同じである。ホテルの中央に庭園があり、その中に小池が3つある。一つは南にあり池中に石灯籠の様な物を置き、周囲に小濠を掘りその小濠に一管を設置し、管中に数十の小穴を開け、そこから水が噴飛する様になっている。二つ目は北側にあり、体半分は女形、半分は蛇の様なものが三人で燈台を持ち上げている石像が池の中に設置され、台頭から水が噴飛する様になっている。アザラシの様な海獣をその池で飼っている。側に珍しい樹や草を植え、山河の風景を形成している。ここから十間程北の所に岩石中に一室を作りその中に仙人が居て読書している。又、その側の壁前に人形が描いてあり、遠目には本物の様に見える。この庭園を半分に区切り、三番目の池がある。女形の石像があり周囲に石を積んで池を作っている。水はその女形より噴飛している。その池に魚や亀の類を飼っている。この池の上に廊下があり、左右の部屋に通じている。ホテルの西南の二階の部屋は全て旅客用の部屋となっている。一階は諸物の販売所で、東の部屋は劇場である。階下に長さ十二・三間、幅八・九間の舞台を設け、数十の障壁を廻り舞台上で左右に回転させて、数種類の風景を作り出している。観客席は舞台前の上中下の三階にある。又、その側に崑

崙奴の劇場が有り、舞台は一階高い場所にあり、観客は平面の所に居て必ずしも、高低差のある座席を設置はしていない。演劇は全て、夕方から始まる。庭園中の数百のガス灯を点して、まるで白昼の様である。男女雑踏して一夜に数百人が見物に来る。その盛大なことは推察すべきである。

ナイアガラ号大略

ナイアガラ号【原文はナイアキラ】は、長さ六十四間【115m】・横九間【16m】、吃水三丈二尺【9.7m】、高さ五層である。初層・二層は雑庫、三層は雑庫と士官及び水夫の部屋である。四層は船尾に船長の部屋が有り、その前左右に士官の部屋が相並び、中央に食堂がありテーブルを並べてある。この所に壁が有り、その先に又士官の部屋が有る。船首の方には食堂の厨房及び水夫の休憩所があり、船首端の左右にトイレがある。ここは士官用の専用トイレで、平生は鍵を掛けていて、水夫が入るのを禁止している。中央に厨房所と並んでスヒール(日本のかぐらさんである：【かぐらさん：下図参照。2~4人で軸にロープを巻きながら、石や大木などの重量物の運搬を行う装置。太い柱を軸とし、その丸太などの回し棒を、横向きに取り付けている。2~4人で回し棒を押して軸に綱を巻き取り、荷をたぐり寄せる。海岸で地き綱を巻き取る装置と同じ構造であり、昔は石を曳くための主力的な道具であったが、現在はウインチにとって代わっている。】)《オランダ語 Anker Spil：碇巻上げウインチ》等の設備があり、碇を上下している。



五層にはマストが全三本、四段帆である。船具は五層・四層に置いてある、砲窓は五階に設け、全十個、皆百ポンド【45kg】以上の大きなカノン砲を設備している。砲数全十四門、その内、ホートホーイツル《オランダ語 Boothouwitzer、船用忽微砲》が四門あり、平生船の中央に配置して、事あるときに砲窓に車で引き出して使用する。日本人一行の部屋は五層の船尾の方にあり、御奉行等の部屋は船尾端でトイレ・風呂が皆備わっている。その次に官吏その次に従臣の部屋が割り当てられ、その間に二つの壁があり、部屋の長さ二間・横一間で、一間を【上下】二段に分けて隔板を設けている。全部で六隔板があり、一隔板に必ず二人を割り当てている。一部屋全十二人が群居していて、極めて狭小である。官吏等は

一部屋に一人或いは二三人で、従者に比べればかなり緩和されている。御奉行等は一部屋一人、部屋の前に食堂があり、室内は綺麗に飾られている。蒸気船はローノーク号と同じくスクリュウ船である。蒸気機関は中央に設置され、煙突は二本で、千二百馬力で船のスピードは最も速いと言う事である。船には日本人一行七十六名、米国人六百名、総計六百七十六名が乗船している。船の内装はローノーク号に比べればそれ程美しくは無いが、唯船長等の部屋のみ少なからず美装している。船内の規則に関してはローノーク号等と変わらないけれども、命令は極めて厳格である。【乗務員各人の】職責に関する検査は勿論の事ながら、神父が日曜日にキリスト教の説教を乗務員全員にする。且つ、部屋での火気使用を厳禁して、煙草を吸うことを許さない。船長は一人で、司令官は乗り組んでいない。このため、祝砲を鳴らすときは小砲を用いる。その他、碇泊中の訓練は少し少なくして、朝夕太鼓・笛を用いるのみで砲を打ち鳴らさない。

米国総説 【原文は「花旗国」とあるが、統一的に「米国」と記している】

米国は(海国図志の解説では、船○星旗により、広東人はこれを花旗と呼んでいる)、北アメリカにあり、一名米利堅国【メリケン】と言う。又、「ウェナイトステート」《United States》と言う。合衆国と言う意味である。米国は北緯24度30分から北緯49度まで、西経66度50分から西経124度30分までである。東は大西洋に面し、西は太平洋【太平洋】に至る。南はメキシコ海【メキシコ湾】に接し、北は英国属地【後のカナダ】に接している。東西間2400里(日本の977里27町21間)【3840km】、南北1300里(日本の529里21町19間)【2080km】、広さ326万0073里(日本の4万1072里)、戸口2325万6792である。東北部に峻嶺なる山並み【アパラチア山脈】が連なっている。西には山並み【ロッキー山脈】が高く聳え、前後中央には平坦な土地が広く広がっている。現在この地に三十一州があり、北部に六州、中央に五州、南部に六州、西部に十四州である。この国の大きな川はミソーリ《ミズーリ、Missouri》、オヒオ《オハイオ、Ohio》で、皆ミシシッピ河に合流して海に流入している。船舶の往来は非常に盛んである。港の大きなものは、北にボストン、中部にニューヨーク、東南にカルレストン《チャールストン、Charleston、サウスカロライナ州》、南部にモントコメリ《モンゴメリー、Montgomery、アラバマ州》、西にニューオーレンス《ニューオーリンズ、New Orleans、ルイジアナ州》があり、全て大きな港である。気候は穏やかで、土壌は肥沃で五穀は全て順調に生育している。その他、草木・鳥獣・魚や昆虫が全て欠けている物が無い。その中で綿花・葉煙草は最も多く生産している。船材にはトチ・カバの類を用いると言うことである。

思うに西暦1292年にスペインのコロンブスが初めてこの地を発見し、それから年々開墾が始まった。1584年に英国が北方の肥沃な土地を侵略し、土着人を放逐して英国人を移民させ、その土地に定着させた。このために、フランスののらくら者が頼って来ること日々に盛んになり、土地が益々開け、遂に肥沃な土地になった。英国が大臣を派遣してその土地の総領を遣らせ【英国の權益を】護らせた。津々浦々に城下町を築き、賦税を徴収した。国の税収は伸び、急激に富強となった。その後、英仏間で戦争が起こり国の税収が不足したため、税額を挙げた。当時英国の植民地人であった米国人は、その虐げに我慢出来ず、国民間で相談・会議を開き、挙兵して英国の要求を拒否しようとした。そのとき、ワシントンが席を進んで以下の様な提言をした。「天の時を失してはならない。英国と断行すべきときである。」 国民がその議案に一致結束し、ワシントンを推挙して大将となし、血戦すること8年、ときに敗戦ときに勝利して、ワシントンの意思は屈せず、英国の総領が終に退却した。仏国が兵を起こしてワシントンを助け、英国を挟み撃ちにした。英国は持ち堪えることが出来ず、時期を見てスペインとオランダが両国に停戦を進言した。英国がこれに従って、ワシントンと相對して会談し、境界の北側を英国領、南側をワシントンに属するようにした。ワシントンは建国を果たし、兵権を返して自分の郷里に帰ろうとしたが、国民が強く推挙して大統領にした。これにより、米国に属する所が時を経て多くなり、現在では三十一州の大強国となった(思うに、ワシントンは元、英国の軍人で武功高く、向うところ敵無しであったが、病気になる郷里に帰って門を閉ざして外出をしなかったが、英国との戦争において大将に推挙されたとの事である(地理全志)。又、一説に、始め英仏との戦争にワシントンなる者が居てその間を行き来していた。英米の戦争に先立つこと百年余り、これは前後して同名の二名の人物であろう。)

初め、ワシントンは国民と議論して次の様に言った。「建国して子孫に伝承するのは私の仕事であるが、国民を教育する任務は有徳の人物を推挙して当たらしむべきである」と。 即ち、州を分け、各州毎に一首長、一或いは数副首長を置き、その他の兵刑・賦税・官吏の仕事を管理し、その他に一大統領を置き、各州の政事を管理・運営させる。これが即ち、プレジデント(貌列志天徳)である。又、副大統領が居て、これを補佐する。皆四年の任期で、疾病等があれば一年・二年でその職を辞す。その職を良く遂行したときは復任して八年間職務を遂行することが出来る。八年の外は敢えて職に留めることをしない。首長は任期が来れば副首長を首長とし、もし副首長の人望が良くなければ郷邑の長を選び、その郷邑の長の名を書いて、堅牢な箱に投入し、推挙数の多いものを長とする。その人物は官吏であつたり庶民であつたりする。大統領を選挙する場合もこれと同様である。

この様にして、大統領は毎年、各州の賦税を徴収し、歳出の外は皆蔵庫に蓄え、みだりに支出することは出来ない。毎年定例の報酬二万五千元【ドルの間違いか。巻一では、艦隊司令長官の俸給は年4000ドルであった】を受ける。唯、年齢が三十五以上で白人種でなければ、その選挙に関与することが出来ない。副大統領は毎年五千元を受ける。各州の知事は九千元、その他上院、下院の代議士は各々俸給を受け取る。且つ、各々任期があり転任する。年齢32歳にならないと、その選挙に関与することが出来ない。その他はこれに準じたものである。一説に、大統領の任期が来れば副大統領がその位に就く。副大統領が辞退すれば、上院の議長がその職に就く。副大統領及び上院の議長が辞退すれば、元大統領を再挙するとの事である。

外国との条約締結・戦争・○・賞罰等に関して、議員と会議してその意見の多いもので決議する。たとえ大統領と言っても、必ず衆議一致を以て決議し、私事で決することは出来ない。唯、命令を出して文武官全員に周知させるのは、大統領だけである。事類により会議する時期が異なる。例えば、農務・工作・貿易・賞罰等及び築造等は十二月初礼拝の日から行い、制令の改革或いは令に従わない者を究問し、国民を教育して法に従わさせる等のことは、正月を以て行う。その他、不時の戦争・条約締結の様なものはこの例外である。

制令には五つ有る。一つは連邦法で、三十一の州に適用する。二つ目は州法で、州毎に同じではない。三つ目は市条例で、市毎に同じではない。四つ目は【州内の】郡条規で、郡の長が条規を作成し、住民を遵法させる。五つ目は行政規則で、行政官庁が自ら作成し、関係者に遵法させる。この五令は、下位の令が上位の令に優先することは出来ない。このため、行政規則が郡条規に勝ることは出来ない。連邦法に至っては、全州に関することであるので、たとえ大統領でも、国民と共にこれを遵法し、破ることは出来ない。

連邦法では、反逆・殺人・強劫《威力で他人をおびやかすこと》・強姦・放火・海盜を最悪の犯罪とする。情姦・偽造・窃盜・争鬪・酔狂はこれに次ぐものである。刑罰に三つある。一つは絞死、二つ目は監禁、三つ目は罰金である。晒し首・流罪・鞭打ち等の刑は無い。反逆・殺人・強姦・強劫・放火・海盜は皆絞死となる。その他は、程度により監禁・罰金の軽重がある。各州・各市に皆監獄がある。獄内の左右上下は皆大きな石造りで、一部屋に数人、或いは一部屋に一人・二人である。皆非常に清潔にしている。部屋には必ず鉄格子の小窓が有り、風通しを確保している。監獄の外は四面に欄を設置して場所を作って囚人を散歩させる。

看守は囚人の衣食を監視し、常時彼等を善導・勸戒している。この様に囚人に必ず【更正のための】職を与えて、遊ぶ閑を無い様になっている。又、礼拝日には必ず聖書を読み聞かせている。そのため、監禁を免除された者は、毎年の生活資金を除くほかは余資が有ると言う事である(思うに、米国建国以来、未だ反逆する者は居ないと事である)。

学校は、郷学館《郡(County)の下の町・村に対応》・県学館《州の下の郡(County)に対応》がある。郷学館は郷中の富裕な人達が金を出して教師を迎え、一郷の子弟を教育している(文字・言語は英国と同じである)。もし、郷中に富裕な人達が居なければ、管轄している行政がこれを支援している。子弟は朝に学校に入って学び、夕方に家に帰る。女性教師は読書と刺繍の科目を教えている。女性教師の給料は毎月6ドルから10ドルであり、男性教師は大抵20~30ドルで定格は無い。県学館は、郡内の人達が行政に願い出てこれを建設するか、行政が直接建設するものもある。その数は、郷学館に比べればやや多いものである。学ぶ者は毎年試験があり、それにふさわしい者を選抜し館内に入学を許可して勉強させる。4年間を学業期間としている。もし学則に従わない場合は、4年を待たずに退学させる。4年間学業に励んで卒業すれば、官吏になったり、軍人となったり、農業・工業・商業に従事する。それは各人の能力に拠るものである。大学館は各州にあり、既に試験に合格した者のみが入学を許可される。その学問の分野は三部門あり、一つは神学、二つ目は医学、三つ目は法律・行政である。3年間を学業期間とし、学業が終了すれば各人その官に就職する。又、聾・盲・啞を教育する学校があり、聾・啞は手話で教え、盲は点字をなぞって読み書きを教える。又、育幼院があり、幼児にして父母を亡くした者を養育している。幼児を養育するには三歳頃から人体の名前、世界各国の名前を教えている。又、瘋癲館(ふうてんかん)があり、瘋癲の人達を世話している。館中に居る者全てに毎年衣服等を与え、人才を発掘・形成させている。このため、現在になって知識が益々増加し、天文・地理・諸技術・数学の分野で悉く研究していないものは無く、貧乏人を救済するのに予め貧乏にならない方策を実施している。既に貧乏となっている者は、救済し、それ以上貧乏にならないようにしている。貧乏を防ぐ方法は、一般に人を雇用して職に就け、もし人を雇用することが無い場合は、郡に濟貧院を設置して彼等を収容し、各種職業を分けて働かせる。その収入は全て行政に入れ、子女には教師を付けて教育させている。各州で皆同じ様にしている。このため、各州で一人の乞食も居ないと言うことである。しかし、自分【玉虫】がワシントン市に居るとき、乞食を一人・二人見た。米国の首都でこの様であるので、地方では況やである。思うに法は整備されているが、遍く浸透はしていないのであろう。

法律は大抵ヨーロッパの法律に倣って制定している。賦税は国中の必要経費の出入を考慮してその額を決定する。むやみに多く徴収することは許されない。その収法の詳細を聞いた訳ではないけれども、軽税・税金を少なくすることによって国民が非常に富裕になるとの事である。

国中、全て天主教(キリスト教)を信じ、各州に教会を建立している。教派が分化して今は各州中で各派を継承し、人々に説教している。そのため各宗派で栄枯盛衰がある。

年月に日本のような節季は無く、又、日に吉凶は無い。唯、七日毎に一礼拝する、いわゆる日曜日である。平日は酒に酔うことを禁じているが、飲んで良い日が有るとの事、即ち、日曜の翌日には酒に酔うことを許している。

官吏等は公の行事があるときは官服を着用し、庶民と見分けられる様にしている。家に居るときは庶民と同じで、或る人は商売をしたり、或る人は農作業をしている。大統領を始めとして【官吏等は】平生一人の下僕も従えず独歩したり、車に乗ったりして散策している。市内の人々これ【大統領が歩いているの】を見て、敢えて帽子を脱いで礼をなすことはしない。大統領といえども人家に入るときは帽子を脱ぐ。

男女の間、男性を下にして女性を上している。一夫一婦で妾を取る事はしない。又、少年の頃より妻を娶ることを許さず、年15歳以上で淑女を尋ねて求婚する。もし【女性が】成熟した者でなければ、市役所に行ってその父兄と話し合い、親交を結んで往来3～5年してお互いの賢愚を知り、しかる後結婚する。その日は男女共に【市役所の?】堂上にのぼり、互いに手を繋ぐ。一人の官員或いは一族の長が居て、二人の名前を一冊に記載して、政府に保管する。この後は離婚するのを許されない。中国の様に花婿が花嫁の家へ赴き迎え入れる親迎の礼は無い。

葬式は、先ず始めに死人が出たとき死人のために沐浴させる人が居て、沐浴後に一枚の薄い衣服を着せ、手を組ませて棺内に入れ、3～5日後に葬る。山地の中を選び、石或いは鉄・錫で囲み、その後棺を入れる。墓の上下に石碑があり、碑面に誕生日と死没日を刻む。又、石の欄干で石碑を囲み、牛や羊の侵入を防いでいる。父母の喪には一年、朋友の喪には三ヶ月、皆黒い喪服を着て墓参りをする。飲食は平生と同じである。

衣服については、男性はツツ袖の様な上着と股引(ももひき)【ズボン】を着用している。頭に帽子を被り、その帽子の高さは七・八寸より小さいが決まっていない。多くは羅紗或いは毛織物で出来ている。その形は円、六角、八角或いは楕円で、何れも帽子の前方にひさしが有り日光を遮っている。の様な形の帽子が有るが、平生は使用せず、礼式の時に必ず着用するとの事である。何れも黒色である。又、ヤシの葉或いはスゲに似たもので作ったものがある。四方にひさしが有り、ひさしの上に黒いリボンが巻いてあり、身分の上下に関わらずこれを用いている。ツツ袖の様な上着は、胸元より腹下までボタンで止め、そのボタンには数種類ある。海軍関係者は碇の上に鷲が止まっている様を彫った金色の円ボタンを用いている。ボタンは一行或いは二列で、その数は一行に十個或いは七・八個を用いている。大抵、その長さは膝までである。後ろは尻の所から左右に分かれていて、各々二重の襞(ひだ)があり、その上下に二個の飾りボタンがある。その襞の間にポケットがあつて物を入れる。又、脇下或いは腰の辺りにも二十個程のポケットがあつて物を入れる(俗に言うサグリである)。袖は細くて長く、手の甲までである。又、同服で長さ僅かに腰の所で止まり、尻の所で分かれぬものがある。寒冷の時これを付けるとの事である。又、表衣としても用いる。皆羅紗で出来ており、黒色或いは霜降色で特に決まっていない。內衣は前と同じ作りであるが、襟が高く《ハイカラー: High Collar》喉下に止まり、後ろは襟上に至る。木綿或いは麻で出来ている【燕尾服やタキシードを着用する場合に着るウィングカラーシャツやラウンドウィングカラーシャツの事と思われる】。又、もう一つの內衣があり、短小で襟や袖が無く、背中の生地は木綿で、肩から脇下に至るまで羅紗・ビロード・フレネルの類で出来ていて、日本の短い襦袢に似ている【ベストVestの事か】。これは寒冷の時に着用するとの事である。股引は幅広で尻の下は皆連縫してあり、腹の下が僅かに分裂してボタンで止めている。或る物は、革紐で肩から十文字に吊るし結ぶ物もある。トイレの時は、僅かにボタンを外す。日本の股引の様に、尻の下が悉く分裂しているのとは異なっている。上等な股引は羅紗で出来ており、下等なものは白木綿である。靴は皆牛革で出来ており、長いものは膝までのものがあり、短いものは踝の下までである。靴底は厚い物は五層、薄いものは一層である。又、ゴムで作っている物もある。これは朝夕或いは曇天の時に用いるとの事である。もし日中或いは炎天の時に着用すれば、忽ち溶けて足をただれさせることとなる。このため、皆靴下を履くが、靴下の長短は必ず靴の長短に合わせる。靴下は日本の足袋の様に親指とその他に分かれてはいない。又、革或いは綿布の手袋を用いている。色は数種類以上ある。下官は同製の衣服であるが、周囲を縫

ってある。着用するときは首より被る【手袋の話か？ 或いは文章欠落か 意味取れず】。又、胸元のボタンを用いるのもあるが、鮑貝或いは堅い樹を用いて作り、極めて粗略である。上等の羅紗を用いることは無く、羅紗に似て薄い物を多く用いる(俗に綿羅紗と言う)。女性は腰から上をツツ袖の様な上着を着、肌に密着して体を細く見せ、袖は細長くて手の甲まで届く。又、広くて日本人の用いている物と殆ど変わらない様な物もある。その上に衾衣(のうえ)【端切れで作ったパッチワークのショールか】の様な大きな衣を着て胸元で合わせ、縁は全て白黒の房が付いている。一襲(かさね) 二襲、三襲と長短の順序に重ねている。腰には鉄製の細い輪を纏い(名前をホブスカイ《フープスカート: Hoopskirt 枠を入れて腰周りを膨らませたスカート》と言う。日本の提灯の輪に似ている。一番上の輪は腰の周囲に合わせて小さくし、以下順次に広くなり、下の輪は一番上の二倍になる。) 上に襷のある薄絹を纏う。是又、一襲から六・七襲まであり、その長さは腰からくるぶしに達して、常に地を這う様である。周囲の長さは腰の数倍にもなる。色は黒色、白色、赤色あり、その他に数種類の色のものである。股には白布の股引を着用している。足には靴下を履き、少しも肌を出さない。髪は左右に分け、まぶたから額の所まで達し、造花をかざしている。帽子は男子とは異なり、後ろは長く、頭上で髪になじませて平坦にし、前面は額からまぶたに達し、縁の辺りに造花を飾る。このため、他人が見ると帽子の頭が後ろにあって傾けて被っているように見える。又、帽子を用いず、黒糸で作った網に似た物で髪を包み、後に造花を飾っている人もいる。又、頭上に種々の飾りをし、その上に網を頭から満面に被る人もいる。その他、下層の人であろう、帽子のみで飾りを用いない人が居る。また衣服で首の左右及び両腕を露出し、縁に数種の飾りをしている人がいる。或る人が言うには、これは女性の礼服で、吉事があれば必ずこの服を着用すると言う事である。自分が思うには、少女や下層の女性と言えども、多くはこの服を用いるので、礼服ではなく只、便利のために用いているのだろう。イヤリング・ブレスレット・指輪は皆金銀・サンゴ・珍石を用い、手には革袋或いは絹袋【ハンドバッグの事か】を携えている。それは数種類あり一々挙げることは出来ない。道路の往来には男女皆こうもり傘を携える。女性が用いるのは非常に小さいもので、僅かに日光を遮るのみである。扇子は羽扇で非常に美しい。紡織は人力に拠らず、多くは水力を用いている。或る人が紡績所に言った時の話である。建物の広さは十二・三間、高さ五層で、毎階毎にその仕事異なる。一階は出来た布を集める所である。二階は綿花を紡ぐ所である。三階は粗糸をつづる所である。四階は細糸をつづる所である。五階は織場である。各階に数個のベルト車を設置し、その建物の側に大きな水車が有って回転している。ここから数個のベルト車に連携している。一日に数百丈を織り出している。只、ベルト車二個に付き

一人の女性が管理しているだけで、非常に簡便である。尤も羅紗の類も同じ機工で織り出し、機械が益々精巧になり、他にこれに勝るものが無い。

飲食は毎日三餐【三食】である。早餐【朝食】は米飯或いはパン及び肉である。他に牛乳・卵・牛油・茶・コーヒー(コーヒーは青豆で、これを煎り粉末にして用いる)がある。午前七時(日本の六時半)より十時の間に、各自都合の良い時間に食する。多食はしない。これが早餐である。午後一時(九時半)より五時(七時半)の間に又食する。これを大餐【昼食】と言う。品は鶏・豚・魚・鴨・牛・羊である。皆、肉を焼きあぶって自分で切り裂いて食う。他に生野菜・糖菓・牛乳・卵・茶或いは酒がある。家族は同じ食卓に着き食事する。テーブルに布を敷き、品物をその上に載せ、各人に一皿、一グラス、一茶碗、一スプーン、一ナイフ、一フォークを配り、これで各人が随意に食事する。日本の様に箸を用いることは無い。調理した物は人の食事の速さに従って出す。又、午後六時(六ツ)より九時(五ツ)の間に又食する。これが晚餐である。その中身は早餐と同じである。これは毎日の食事の定番である。

金・銀・鉛・銅は場所に依存する。唯一鉄は各州に有り、非常に多い。このため、平生使用するもので、まるで日本の竹木の様であり、垣根の柵や笥(かけい)等に鉄を用いている。橋に用いているものもある。自分【玉虫】がワシントン市に行った時も鉄橋を渡った。鉄の多いことはこの様に分かることである。

貨幣には、金・銀・銅の三種類がある。金貨は50トルラル【ドル：dollarの事と思われる。以下ドルと記す】から25セントまで、その内、50ドル・50セント・25セントの三金貨は八角形で、その他は皆円形である。或る人が言うには、金貨1ドルから20ドルまでは政府で鑄造している。20ドル以上は市中の町人が利便のために自分で鑄造している。もし金の品質が悪い時は嚴重に罰を受けるとの事である。銀貨は1ドルから3セントまでで、銅貨は1セントと半セントである。これ等は皆円形である。その価値の違いを考えると、全て、金銀の差は一对十五に相当する。銀と銅の差は一对四十四に相当する。銅に二種類あって、それらの差は一对十九に相当する。その他に紙幣があり、1セントから50ドルまでである。現在の金・銀・銅貨の軽重は以下の様である。

一 金 1 ドル	(この重さは四分五厘)	【1.69g】
一 金 2 ドル	(この重さは一匁一分五厘)	【4.31g】
一 金 3 ドル	(この重さは一匁三分五厘)	【5.06g】

一 金 5 ドル	(この重さは二匁二分五厘)	【8.44g】
一 金10ドル	(この重さは一匁三分五厘)	【5.06g、記載ミスか】
一 金20ドル	(この重さは九匁)	【33.75g】
一 金50ドル	(この重さは七六匁五分)	【159.75g】
一 銀 1 ドル	(この重さは六匁五分)	【24.38g】
一 銀50セント	(この重さは二分五厘)	【0.94g、記載ミスか】
一 銀25セント	(この重さは一匁六分二厘五毛)	【6.09g】
一 銀10セント	(この重さは六分五厘)	【2.44g】
一 銀 5 セント	(この重さは三分二厘五毛)	【1.22g】
一 銀 3 セント	(この重さは二分)	【0.75g】
一 銅 1 セント	(この重さは二匁六分)	【9.75g】
一 銅0.5セント	(この重さは一匁四分)	【5.25g】
一 銅 1 セント	(この重さは一匁二分、但し純銅ではない。錫との交雑銭)	

米国は元より富裕の国で、特に北カリフォルニア、サンフランシスコから莫大な金鉱が発見されて以来、益々富み栄え、現在に至っている。合衆国の州が一つとして富裕でないのは無く、このため、銀の価値が非常に低く、日本の天保銭を使用する様な感覚である。物価は高騰して日本の方銀三・四両を支払うとしても、珍しい物品一つも購入できない。

陶器は国中に沢山有るけれども土が悪く、中国の製品の技巧に及ばない。全て肉が厚く、叩いた時の音が非常に悪い。唯、堅牢で簡単には壊れない。色は種々あるが白色のものを多く見かける。

書板は木板を用いずに、皆鉛字活版である。画或いは地図の類は銅版或いは石版を用いている。これ等は皆蒸気の力を用いて人力に拠る部分は非常に少ない。

田畑は周囲に柵を設置し、牛馬が勝手に侵入するのを防いでいる。或る年の一年は麦或いは蔬菜を植え、次の一年は牛・羊を放牧するというように、交替して牧植しているとの事である。

米国中に黒人が六分の一居るとの事である。その中に、黒人に似て黒人でなく白人に似て白人でない人が居る。これは白人と黒人の混血によるものである。これ等の人々は政事に関与することが許されず、白人の下僕か或いは汚い作業に従事する。しかし、黒人は米国固有の人種で、白人は英国の人種であり、客が逆に主

となるのは悲しむべきことである。唯、賢愚の違いは止むを得ないことである。そうであるならば、人種によって教え導くことの出来ないものがあると考えられる。

海軍将校及び軍卒の数

海軍将校

- 一 船長 68人
- 一 ロイテナント 327人
- 一 指揮官 97人 《航海長のことか》
- 一 上等下長 69人 《海兵指揮官か》
- 一 歩兵 10,329人
- 一 農兵 2,111,029人

軍艦の数

- 一 リニー船 10艘 大砲 872挺
 - 一 フレカット船 13艘 大砲 656挺
 - 一 コルヘット船 20艘 大砲 400挺
 - 一 ブリッキ船 4艘 大砲 20挺
 - 一 蒸気船 24艘 大砲 172挺
- 右全71艘、大砲 2120挺

一年税収及び費用の数

一年税収

おおむね、一億4840万ドル

一年費用

精兵雑費 727万ドル

他州雑費 2,207万ドル

国内雑費 406万ドル

陸軍用 2,830万ドル

海軍用 1,670万ドル

定式操作 2,110万ドル

借金返済 3,800万ドル

総計 1億1,750万ドル

この数条は、自分【玉虫】が聞いたものである。諸書を調べると、一部は合
い、一部は違う場所があり、このため、合致した所を記載し、違っている
ところは自分が聞いた所をそのまま記載している。

【卷五 終】